

学位論文審査の要旨

		要 旨
学位申請者	吉井 祥 【比較社会文化学専攻 平成28年度生】	<p>本論文は、哀傷歌（上代では「挽歌」）を中心として、平安時代の和歌の持つコミュニケーション機能とその変遷を明らかにしようとしたものである。哀傷歌は人の死という重要なテーマを扱うものでありながら、その実態については恋歌に比べて驚くほど先行研究が少ない。本論文は上代後期から平安前期の哀傷歌を網羅的に調査し、いつ、誰によって、誰に向けて詠まれ、その表現はどのように分類整理できるかを初めてデータ化し、分析を試みている。</p> <p>その結果、上代の挽歌生産はそのまま平安に継承されたわけではなく、平安時代になり、特に古今集撰者たちの手によって新たに哀傷歌が立ち上げられ、私的な歌のやり取りが以後増加したこと、それによって知人同士の哀傷の共有が広まったことをまず明らかにした。</p> <p>次に平安哀傷歌の表現につき、歌を贈る際に対面であるか非対面であるか、他者が遺族に贈るのかといった場面や相手との関係性が表現のタイプを規定するという点を明らかにした。さらにそれを通時的に分析し、当初はただ哀傷の念を表白するものが多かったのが、次第に相手（遺族）を思いやる表現スタイルが確立されたことを明らかにした。</p> <p>本論文はさらに問題を広げ、平安前期までの和歌の贈答全体の形成史を対象化し、前の歌に「和する」タイプと「切り返す」タイプとが本来は区別されていたことを万葉集の題詞の用語の分析により指摘し、それが平安では「返し」に統一されてしまうため区別が見えなくなっていること、しかし漢文文献（古記録等）に徴すれば、平安中期まで意識の上では区別があったことが実証できることを論じた。</p> <p>以上、本論文は和歌によるコミュニケーションの歴史についての包括的な初めての論考で、発想の独創性、調査の網羅性において特に優れていると評価できる。審査過程では論述の不備や文章表現の粗さの指摘が多く寄せられ、申請者はそれらについて誠実に改稿を行った。公開発表会では専門外の聴衆からの質疑もあったが、基礎的などころから誠意をもって答えた。以上より、審査委員会は博士（人文科学）、Ph. D. in Japanese Literature の学位を授与することが適当と判断した。</p>
論文題目	和歌の機能とその変容 ―哀傷歌を基軸として―	
審査委員	(主査) 教授 浅田 徹	
	教授 古瀬 奈津子	
	准教授 松岡 智之	
	講師 藤川 玲満	
	教授 鈴木 宏子 (千葉大学教育学部)	
インターネット公表	<p>○ 学位論文の全文公表の可否 (可 ・ <input checked="" type="checkbox"/> 否)</p> <p>○ 「否」の場合の理由</p> <p>ア. 当該論文に立体形状による表現を含む</p> <p>イ. 著作権や個人情報に係る制約がある</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> ウ. 出版刊行されている、もしくは予定されている</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> エ. 学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている</p> <p>オ. 特許の申請がある、もしくは予定されている</p> <p>※本学学位規則に基づく学位論文全文のインターネット公表について</p>	